

私
た
ち
は
光
の
あ
る
と
じ
ろ
ろ
か
ら
来
た



春へ



春へ

だんだんに春か

寒い冬のときを

過ごす

ひたむきな声

その想いが熱く生身のそこにある

帰れない日

辿り着けない日のあいだで

見失う


言葉

消えた記憶

あるいは

忘れられた花の名を

春は告げにくるのだ。



朝の光

石に花をそえる

草をなでる風がそれを愛でる

遠い記憶

時が冷える

夢はすでに凍えている

窓に朝の光

手のひらで顔をおおう

指のすきまから溢れてくる光

生きよう。

窓

桃色の囁きが枝にゆれる

風が春を告げている

誰かの嗚咽がピアノソロのように聞こえる

塀の向こうをとおり過ぎていく人がいるのだ。

散歩

あなたは

鳳仙花のような記憶を抱いて

公園を歩く

沈む陽に

永い影をつれて。

思い出

かげろうのように

まなざしの先に

ゆれる思い出がある

熱い日差しの中か

畦道を

訪ねて行くと

遠く

畑のむこうまで

だれもいない。

明日


明日

光へ
ふりむくと
あなたがいる

紛れも無く
無二のあなたがいる
そして
私たちがいるのだ

光へ
強く思うと
私たちの中に
日は静かに昇り始める

そして
あなたと私の世界に
時がそっと
回り始めるのだ



桜散る

桜の花びらが風と往く

木は不動のまま空に帰る

永劫の時の中に

私たちは在り続ける

夢のようだ。

ビン

視線の先に

ころがっている

ビン

捨てられた現実を超えて

光っている

劫初からの光を享け

光っている

ビンが在る。



落日

あなたはもうじゆうぶんに
やさしかった

それ以上にはだれも望まない

影は地に帰り

東方の夢をつむぐ機（はた）はとまる

わたしたちの知らないところで
大いなる約束はまもられたのだ

それゆえに

空は朱色のつばさをたたみ

約束の証として

日はしずかに

落ちてゆく。

幻影

ねえ

あの人は眠ったのかしら

身の丈ほどの花にかこまれて

私は帰る所に迷う

私の頭の倍ほどもある

菊科に似た花に息苦しさを覚え

それでも

どこえいけばいいのか

花の林のさらに奥へむかおうか

あの家の屋根らしき方へむかおうか

意志の不在に

いろとりどりの想いが舞う

ねえ

あの人はもう眠ってしまったのかしら。

日々

日々

一日の大切さを
絶望で計ってはいけない
希望で計ってもいけない

私たちのうごめく場所は
あるいは

私たちのもがく場所は
もっと混沌として
もっと愛おしい場所なのだ

もし計らねばならぬとしたら
それぞれの

人の
悲しみの深さで計るのが
いい。

A full moon is positioned in the upper left quadrant of the image, glowing against a soft, purple and blue twilight sky. Below the sky, a dark green field is visible, suggesting a landscape at dusk or dawn. The overall mood is serene and contemplative.

月

一群の人が祈りを捧げている
月をみているのだ

やすむといい

清く水は

あなたのみなもとまで
流れてゆく。



石

あるべき場所に

それは置かれている

拒絶ではない

豊饒のはての

姿なのだ

ひそかに手をあてれば

年月のぬくもりが

在る。



橘

マルカートの高さで
橘はたもたれている

空洞の青い世界に息づく

故郷のような懐かしさを
心に覚え

五月は満たされてゆく。

母

もうあの人は
透明な世界にいる

時おり私たちの世界へ
愛に水をそそぎにくる
尊いものがみえてはまたきえる

母よ

どうかもうすこしの間
私たちのそばにいてください。

スイセン

棧橋からもやい綱をはずすと
鯿は夜明けの海へすべりだしてゆく
誰もそのようにしてあゆみだしたのだ

時のゆれの狭間で
生はたえず問いかけてきた
私の影の意味を

陽が落ちてゆく
残照がおおきなひとつの証のように輝く

永いゆれをすごし
鯿はつかのまの岸辺へとむかう

きらめく波のむこうには
白いスイセンの花が
覚悟の静けさで
鯿をむかえる。



睡蓮

かわらぬひがよどむ

みずのそこへ

ふかく

しずむ

なくこえも

わらうこえも

もとめるこえさえも

とどかないほどふかくしずむ

ただおわることのないのちのしるしを

ただきえることのないのぞみのしるしを

みずのうえにおいたのです。

薔薇

無数の
とがる
痛み
その
記憶
の
うずきを
かさねた
豊かな日の
花びらが
咲く。

蝶

濡れたブロック塀のうえに

一頭の蝶がとまり

雨のなかを飛び去ってゆく

あとには重い記憶だけがのこりつづけた

長く雨は降りつづいた

塀のうえに

忘れられたスイカズラの花のうえに

眠る私の海のうえに。



夜明け

空はまっぴている

すべてがゆるされる時を

陽がのぼるのだ

刻苦の闇のなかで

浜木綿はしっている

海に夢が満ちる時を

やがて陽がのぼるのだ。



花

暖かい飲み物が

手のひらを満たすように

陽の温もりが

体のなかをめぐる

僅かな時のあいだに

蘇る日

願わくば

ただ花のように

在りますように。



雨上がり

雨上がり

光は

神殿の回廊を

巡ってくる

空は

重い記憶を消して

蘇生する

地には

新しい

人の気配がする

雨は上がったのだ。



道

みちびくものもなく
ねむりにつく

あゆむものの
あしかせをはずせ

おいすがるのは
いつもすぎさったきせつだ
そこから
すこしでも

とおく
道を

ゆく

わたしたちの

やくそくをはたすために。

追記

背景にフリー写真を使用させて頂きました。
提供して下さいました全ての方に感謝申し上げます。